

樹木画法の研究 (IV)

中 園 正 身

Research in the Tree Drawing Test (IV)

Masami NAKAZONO

Summary

The purpose of this research is to make up the findings in the previous study (2001) I reported the following results, that is, each part of the oral, the anal, and the genital zone of human being correspond to the root, the trunk, the flower and the fruit of the tree. The result of this study supported again the upside-down relation between the human being and the tree in the questionnaires to the 224 undergraduate students.

1. はじめに

筆者は、樹木画を解釈する新たな視点として、人間と樹木の倒立関係を考慮すべきであることを主張した(2000、2001)。このことはすでに思想・文化史的にはあまねく知られていること(「逆さまの木」など)であり、そして、発達心理学における人の発達方向が頭部から足部へ、中枢部から末梢部へ進むという発達の原理(Gesell,A)と、樹木の根部から葉部へ、幹部から枝部への成長方向とは、明らかに両者の倒立関係を示唆していることなどを理論的に考察した(2000)。そして、大学生を対象とした質問紙調査において人間と樹木の関係は、倒立関係と見なす場合と直立関係と見なす場合とがあることが分かった(2001)。ところで、この質問紙調査には、2つの疑問が残った。一つは、「人間は逆立ちした樹木である」というPlatonの主張をもとに、人間を主語にした質問項目が用いられたが、もし、「樹木は逆立ちした人間である」

というAristotelesの主張にしたがって、樹木を主語にした質問形式にしたならば、どのような結果がでるであろうか？確かに、単に人間と樹木の倒立関係をみるのであるなら、どちらでもかまわないようであるが、樹木画法の投影法としての性格を考慮にいれば、図と地の関係では樹木が図であり人間は地(背景)となり、樹木画のなかに人間がどのように投影されるかを検討することであるとするならば、質問紙法においても質問項目は主語が樹木であるのが自然であろう。

もう一つは、E.H.Eriksonのbody zoneとorgan modeの2つの概念を操作的に用いたが、樹木(植物)と人間(動物)という大きく隔たったもの同士の関係を検討する時には、2つの概念は慎重に扱われるべきであった。すなわち、body zoneの視点から両者の倒立関係を人間の頭、胴体、生殖器に対して樹木の根、幹、花・果実というように各部位を対応させることと、

organ mode の観点から人間と樹木の各部位の働き（機能）に着目して両者の倒立関係を吟味することとは区別してなされるべきであった。なぜなら樹木と人間の各部位がたとえ同じでも異なる働きをする場合があるからである。したがって、今後の調査においては body zone と organ mode の 2 つの視点から質問項目を作成しなければならない。

2. 目 的

本研究の目的は、前回の質問紙調査を補充・補完するために計画され、次の 2 点を明らかにすることをねらいとする。

- (1) 前回実施した人間を主語にした質問形式に替えて、樹木を主語にした文章からなる質問紙法をもちいることによっても、樹木と人間の各部位の対応関係を検討することで、両者の倒立関係を実証できるであろう。すなわち、E.H.Erikson の body zone 説において、樹木の根は人間の頭部、樹木の幹は人間の胴体、樹木の果実・花は人間の生殖器にそれぞれ対応するであろう。
- (2) さらに、樹木と人間の倒立関係は、両者の各部位の機能を比較検討することで一層明確にされるであろう。すなわち、Erikson, E.H. の organ mode 説において、取り入れ incorporative の機能は、樹木では根と葉、人間では口、鼻および体表面がその任にあたり、保持・排泄 retentive-eliminative の機能は、葉（樹木）に対して肛門・泌尿器（人間）がそれにあたり、侵入・包含 intrusive-inclusive の機能は、花・果実（樹木）に対して生殖器（人間）がそれぞれ該当するであろう。とするならば、保持・排泄機能と侵入・包含機能では、樹木と人間の倒立関係は明確

であるが、取り入れ機能では、樹木と人間は、倒立関係と直立関係とが混在していることが予想される。

3. 方 法

前回行った「身体部位に関する調査」という質問紙法において、今回は、「樹木に関する調査」と調査名をかえ、同時に、次の 2 点を変更した。

- ① 質問項目の主語を人間から樹木に変えた。
- ② 新たに organ mode に関する質問項目を 3 項目（根、葉、果実の 3 部位の働き）付け加えた。

質問紙は body zone に関する質問項目 11 個と organ mode に関する質問項目 3 個、計 14 個から構成されていた。それぞれの質問項目の例を 1 つずつ示すと次のようになる。

教示文はつぎの通りであった。

次の各文章の（ ）内に直ちに思いつく言葉を挿入して文章を完成してください。

(例) 木の根部は、人の身体にたとえば、人の（ ）である。

木の根部のはたらきは、人の身体にたとえば、人の（ ）である。

質問紙調査は、2002 年 7 月に B 大学 (142 名) と K 女子大学 (82 名) の学部 2 ～ 3 学年生で計 224 名であった。調査は授業の終わりに一斉に配布し、無記名で回答してもらい、その場で回収した。学生たちは、パーソナリティ論とカウンセリング論の受講生であったが、樹木と人間の倒立関係などの予備知識はなかったし、研究の目的は樹木と人間との関係を調べるとだけ伝えられた。

4. 結 果

- (1) 樹木の部位と人間の身体部位の対応関係について

表1：樹木の葉部と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	その他	計
69	95	11	1	48	224

$$\chi^2=65,89 \quad df=3 \quad p<0,001$$

(注) カイ二乗検定する際、「足」のセルの個数1と少数のため「胴体」のセルと合併させセルの数を4にした。「その他」には指・指先・爪・手足など手か足のどちらに入れたら良いかわからないものなどや無回答を含めた。

表2：樹木の幹部と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	その他	計
2	13	168	13	28	224

$$\chi^2=301,04 \quad df=3 \quad p<0,001$$

(注) カイ二乗検定に際し、「頭部」のセルの個数2と少数のため「手」のセルと合併させセル数を4にした。「その他」には体・身体・骨などや無回答を含めた。

表3：樹木の根部と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	その他	計
6	0	21	179	18	224

$$\chi^2=362,47 \quad df=3 \quad P<0,001$$

(注) カイ二乗検定の際、「頭部」のセルと「手」のセルを合併させセルの個数を4にした。「その他」にはころ・体・骨などや無回答を含めた。

表4：樹木の中枝と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	その他	計
1	157	37	4	25	224

表5：樹木の小枝と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	その他	計
10	170	1	4	39	224

表6：樹木の果実と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	その他	計
91	14	30	0	89	224

$$\chi^2=88,81 \quad df=3 \quad P<,001$$

(注) カイ二乗検定に際し、「足」のセルが少数なので「胴体」と合併させセル数を4にした。「その他」にはころ・爪・アクセサリ・希望など抽象語などや無回答を含めた。

表1によると、樹木の葉部は、人間の手や頭部の上半身に対応し、胴体や足などの下半身とは関連しないと言える。

表2によると、検定の結果を待つまでもなく、樹木の幹部は圧倒的に人間の胴体に相当するという回答に集中した。

表3によると、これも検定するまでもなく、樹木の根部は人間の足に相当するという回答が圧倒的多数をしめた。もう一つ、当初、予想していた「頭部」との関連はほとんど認められなかった。

表4および表5によると、統計的検定をするまでもなく、樹木の中枝や小枝は、人間の手に相当することが分かる。

表6によると、樹木の果実は、人間の頭部に関係が深いことがわかる。また、手、胴体、足以外のその他と回答した数が多いことも特徴的であり、果実の持つ多様な象徴性に留意しなければならない。特に、その他のなかで身体部位ではないが、性・生殖機能（精子・卵子・子ども・赤ん坊・胎児・妊娠など）をあらわす回答16が含まれていること、また、異性関係に寄与すると思われるもの（アクセサリ・化粧・指輪・笑顔・あたたかさ・など）を示す回答が10であっ

表7：樹木の花と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	その他	計
150	12	3	0	59	224

た。

表7によると、統計的検定をするまでもなく、樹木の花は、果実（表6）と同様に、人間の頭部に対応すると言える。

表8によると、樹木の根毛部は、人間の下半身、特に、足に関係深く、また、身体部位に関係なく、体毛に関係づける例も少なくない。

表9によると、統計的検定をするまでもなく、樹木の幹のふくらみ部は、人間の胴体に相当することはあきらかであるが、2割弱の人達（41人）が、幹のふくらみから人の筋肉や脂肪を連

想している。

表10によると、樹木の根の働きは、栄養摂取の機能（36名）を加味すると人間の頭部と関連が一番深い。次に、人間の足との関係も認められる。

表11によると、上半身（頭部・手）と下半身（胴体・足）にわけて比較すると、比率としては上半身の方が多いが、生殖機能を下半身に含めれば、比率は逆転する。なお、その他が圧倒的に多いということは、果実の働きと人の身体との関係は一樣ではないことが、わかる。

表12によると、表11と同じくその他の回答が多く、樹木の葉の働きと人間の身体との関係は多様である。なお、上半身（頭部・手）と下半身（胴体・足）とをくらべると、葉の働きは、上半身との関係が強い。呼吸の回答には、皮膚呼

表8：樹木の根毛部と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	毛	血管	その他	計
23	12	2	96	50	13	28	224

$$\chi^2=141,57 \quad df=5 \quad p<0,001$$

（注）カイ二乗検定の際、「胴体」のセルが少数なので「足」のセルと合併させセル数を6にした。

表9：樹木の幹のふくらみ部と人間の身体部位の関係（人数）

頭部	手	胴体	足	筋肉・脂肪	その他	計
3	5	116	10	41	49	224

表10：樹木の根の働きと人間の身体との関係（人数）

頭部	手	胴体	足	血管	栄養摂取	その他	計
60	0	26	46	18	36	39	224

$$\chi^2=27,35 \quad df=5 \quad p<0,001$$

（注）カイ二乗検定の際、「手」のセルが0なので「頭部」のセルと合併させセル数を6にした。

表11：樹木の果実の働きと人間の身体との関係（人数）

頭部	手	胴体	足	生殖機能	その他	計
42	3	25	0	51	103	224

$$\chi^2=60,91 \quad df=3 \quad p<0,001$$

(注) カイ二乗検定に際して、「手」のセルが少数なので「頭部」のセルと、「足」のセルが0なので「胴体」のセルと、それぞれ合併させセル数を4にした。

表12：樹木の葉の働きと人間の身体との関係
(人数)

頭部	手	胴体	足	呼吸	その他	計
35	35	22	0	47	85	224

$$\chi^2=52,59 \quad df=4 \quad P<0,001$$

(注) カイ二乗検定の際、「足」のセルが0であるため「胴体」のセルと合併させセル数を5にした。

表13：body zone からみた樹木と人間の身体部位

樹木	人間の身体部位
葉部	頭部と手
幹部	胴体
根部	足

表14：organ mode からみた樹木と人間の関係

樹木	人間の身体
根の働き	頭部・栄養摂取
果実の働き	胴体・生殖機能
葉の働き	頭部・手・呼吸機能

吸というものも含まれているのですべてを身体の上半身に結びつける訳にはいかないが、呼吸の回答の大半は肺呼吸を指すので、そのことを加味すると、樹木の葉の働きは、人間の上半身と関連深いと言えよう。

5. 考 察

本研究は、前回の研究の結果を補充・補完す

るために実施された。本研究で明らかにしたかった2点について検討したい。

- (1) 木と人間の倒立関係を明らかにするため
の質問紙調査において、質問項目を作成
する際、文章の主語を樹木にするか人間
にするかの2通りがある。すなわち、
Platon 型の「人間は逆立ちした樹木であ
る」という風に、人間中心に考える方法
と、Aristoteles 型の「樹木は逆立ちした
人間である」という風に、樹木中心に考
える方法とである。前回の調査では、
Platon 型を採用した。それに対して、今
回は Aristoteles 型を用いた。結果は、表
1～表3から明らかのように、Erikson,
E.H.の body zone の視点から樹木と人
間の関係は表13で示すことが出来る。

すなわち、樹木と人間の身体の各部位を対応
させる形で問うと、樹木と人間の関係は倒立
関係ではない。両者ともが、地面に立つ直立
の姿である。

- (2) 一方、Erikson,E.H.の organ mode の視
点から樹木の各部の働きと人間の関係を
みると、表10～表12のように、樹木と人
間の関係は、一様ではない。それをまと
めると表14のようになる。

表14をどのように読み取るかは、単純にいかないところがある。表に明記されていないが、樹木の3つの働きに対して、無回答が多い順に記せば、「果実の働き」について21名、「葉の働き」について11名、「根の働き」について6名であった。さらにこの順位は回答の内容の多様性にも当てはまり、ちなみに、「果実の働き」82種類、「葉の働き」61種類、「根の働き」42種類の異なった種々の回答が得られた。このことから推測されるのは、機能的観点から樹木と人間の関係を1対1対応で捉えることは難しいし、多様な関係が考えられる。このような個別的多様な関係がむしろ個々の描画の解釈に重要であることを改めて痛感させられる。このことを押さえた上で、表14を吟味してみたい。

表14から、樹木の根の働きは、人間の頭部（口、胃、消化器官、など）の食物摂取と栄養補給の機能と関連づけられている。このことは明らかに樹木と人間の倒立関係を示唆する。次に、樹木の果実の働きは、人間の胴体（性器、子宮、など）の生殖機能と関連づけられる。この事実も樹木と人間の倒立関係を予想させる。最後に、樹木の葉の働きは、人間の頭部（口、鼻、髪、など）の呼吸機能および手（これはどのような機能かは回答からは判明しない）と関連づけられる。このことから樹木と人間の倒立関係の仮説は否定される。すなわち、葉の働きは、呼吸機能に関連して人間では、口や鼻などの頭部に対応すると考えられ、organ modeでは、取り入れ incorporative 機能を意味し、根の働きの栄養摂取機能と同じである。今回の調査において、葉の働きとして、保持・排泄 retentive-eliminative 機能を示唆する回答は、腸2名、排泄2名、発汗1名の計5名に過ぎなかった。このことから判断すると、樹木における保持・排泄機能がどの部位で行なわれるかは、人間ほど明確でないといえよう。ただ、表9を細

かく検討してみると、樹木の幹のふくらみ部が、人間の身体の胴体部に該当するとの回答が多かった（116名）。この胴体部の内訳をみると、多い順にベスト4を挙げると腹50名、胸25名、尻14名、腰13名であった。また、身体部位ではないが、幹のふくらみが、筋肉（23名）、脂肪（16名）に喩えられることが少なくなかった。これらの部位とその組成は、いわば保持 retentive の機能を示唆するといえないだろうか。とするならば、樹木の幹のふくらみと人間の下半身（腹、腰、尻など）とが、関連すると見るのが自然であろう。いずれにしても organ mode としての保持・排泄 retentive-eliminative 機能が、樹木の場合は人間ほど明確になっていない。理論的には、樹木の葉部から炭酸ガスを放出するという人と人間の肛門部から大便を排泄することとは、同質の機能であると言えるので、このことから樹木と人間の倒立関係を証明できると予想したが、今回の調査結果では樹木の葉部と人間の肛門部との関連は見出せなかった。

以上の(1)と(2)の考察から、結論として次のことが指摘できる。

- (1) Erikson, E.H. の body zone の考えを用いると、樹木と人間とは、倒立関係ではなく、両者とも、正常に直立した関係である。
- (2) Erikson, E.H. の organ mode の考えを採用すると、樹木と人間とは、倒立関係を示唆する。すなわち、樹木の根と人間の頭部（栄養摂取）、樹木の果実と人間の胴体（生殖機能）との対応から両者の倒立関係を認めることが出来る。しかし、樹木の葉と人間の肛門部（排泄機能）とは関連が認められなかったことから、両者の倒立関係は想定できない。葉の働きは排泄機能ではなくて、呼吸機能とみなせば、葉部と肛門部は対応しないのは当然

かも知れない。

最後に、今回の研究でより明確になったことは、樹木と人間の倒立関係を検討するに際して、両者の共通の働き、すなわち、「植物性機能」である栄養・呼吸・生殖（・生長作用）をもとにして、両者の対応関係をみるのがよいということ。

- (3) 今回は生長作用については調査対象から漏れてしまったが、それは前回の調査に引き続き E.H.Erikson の図式にこだわったことに起因している。樹木には排泄器官（機能）が明確でないので、今後は排泄器官の排泄機能で樹木と人間を比較検討するのではなく、それに代わって両者の生長作用において両者の関係を吟味していかなければならないと考える。というのは、E.H.Erikson の organ mode において肛門部の retentive - eliminative mode は心理的「自律・自立」に深く関連すると言われるが、このことを樹木と人間の関係で捉えたとすれば、文字通り「樹立」の様相、すなわち、「生長作用」ということになるからである。

6. おわりに

樹木画の基礎的研究として樹木と人間には倒立した関係が存在することを理論的に実証的に行ってきた。一連の研究は、1枚の樹木画から得られる有効な情報を可能な限り多く収集する手段として、「根」を積極的に描いてもらう教示法を工夫したことから始まった。根を含めて樹木全体を描いてもらうことを進めていくと、次に樹木と人間の関係をさらに全体的に多角的に捉えたい衝動にかられた。その第一弾として樹木と人間の倒立関係を取り上げることとなった。

今後の研究課題を2つ示しておきたい。

- (1) 樹木画法に「逆さまの木を描く」方法を新たに付加することの臨床的有効性を検討する。
- これは2枚画法になるが、そうすることによって樹木画法の臨床的価値をどれだけ高められるだろうか。とくに、人格の至高性（宗教性・倫理性）などの特徴をあきらかにできないだろうか？
- (2) 次に取り上げなければならないのは、「善悪の木」として描かれることのある樹木、すなわち、樹木を「善」「悪」の相反する2本の木を中央で根が接し、左右に幹や枝葉が伸びる「横書きの樹木画」に関する研究をおこなう。同根をもった2つの木が正反対の方向に伸びることで人格の二面性が投影されやすいかもしれない。これらの研究によって、筆者の考えている樹木画法は3枚画法として形式的には一応、完成する予定である。

7. 文 献

1. 中園正身(1996)「一変法としての樹木画法の研究—根を強調した教示法の導入について—」心理臨床学研究 Vol.14 No.2 日本心理臨床学会
2. 中園正身(2000)「樹木画法の研究—樹木心理学の視点から—」文教大学臨床相談研究所紀要 第4号
3. 中園正身(2001)「樹木画の解釈論について—樹木心理学の視点から—」文教大学人間科学部紀要 第22号
4. 中園正身(2002)「樹木画法の研究(III)」文教大学人間科学部紀要 第23号